

『鉢かづき』の恋

——御巫本との比較による御伽文庫本の読みと特徴(二)——

富田成美

四、恋の阻害

秘密の恋はやがて露見する。御巫本では「御所中の女はうたち、人々」によって、御伽本では不特定の人々によって、二人の恋は非難される。しかし、その非難の対象は次のように異なる。

あれほどの、いやしき物に、御めをかけ、まくらを、ならへさせ給ふらんことの、あさましさよとぞ、た、みわらひ、まいらせける。(御巫本)

もとより高きも賤しきも、男はあるならひ、立ち寄り給ふとも、あの鉢かづきめが、近づき参らせんと思ふ心の不得心さよと、憎まぬ人はなかりけり。(御伽本)

このように、御巫本では、「鉢かづき」を床に侍らせたとして、「中将」の行為が嘲笑されているのに対し、御伽本では、「宰相」

と契った「鉢かづき」自身が、身分差を犯したと非難されている。「宰相」も後には「鉢かづき」を捨てないことを、「世にも人なきやうに」「をかしき御心」と嘲笑されるが、先に「鉢かづき」が非難されていることで、「宰相」への中傷もそれに重なり、「鉢かづき」に対する障害がより大きくなる。

具体的な二人の恋の障害は、御巫本でも御伽本でも、二度にわたって描かれる。第一は、御巫本では、父「閔白」が女房たちの誹謗を聞いて、「鉢かづき」を淀川へ捨てることである。明確な理由は記されていない。流された「鉢かづき」は、「あきなひ舟」によって岸へ投げ上げられ、一命を取り留める。「鉢かづき」にとっては、この事件は、「中将」への思いの表明であった。

いと、心ほそくて、此ほど、なれまいらせつる、ちうしやうとの、御事のみ、おもひいてられて、なみたに、むせひつ、けて、かくはかり

よと河の、なみとなみたに、ぬる、袖、ほすひまもあらず、

恋の進展の場面では「鉢かづき」の思いはまったく描かれていなかったが、ここで初めて、「中将」を慕う心がわかる。ただ「中将」との直接的な対話や行為ではない。「中将」にとつても、この事件は、「鉢かづき」への恋慕の情を、他者に具体的に示す機会となった。「中将」は家臣を召して「鉢かづき」の行方を探させる。そして、「鉢かづき」が淀川へ投げ捨てられたことを知らされると、腹心とともに密かに探索に乗り出し、捜し出して「御所中」にそ、しのひいらせ」た。

男主人公が自分の前から消え去った恋の相手を探すために家を出て放浪することは、御伽草子の公家物の恋愛物語には数多いパターンである。「桜の中将」「扇流し」などがある。これらの物語では、放浪の苦難を体験して再会することで、男主人公は人間的成長を遂げる。そのため、旅の始めに神仏に祈誓をかけて、その成就を願うことも多い。たとえば「扇流し」では、清水・六角堂をはじめ三十弱の社寺を巡って祈誓する。

重ね重ねの祈誓は男主人公の覚悟の程を示し、旅の苦難は、それを受けることで同時に、自分の恋心の強さを示すことにもなる。しかし、御巫本「鉢かづき」では、誓願も具体的な旅の苦難も描かれない。「中将」は淀川ですぐに「鉢かづき」と再会し、邸に連れ帰る。恋のパターンは踏襲しているが、同種の作品に比べて、主人公が体験する苦難が少ないだけに、その克服による達成感も、

恋心の強さも、インパクトが弱くなっている。

また、「入水」という要素は、御巫本では「鉢かづき」が実家を追放され放浪する途次に配される。物語での女性の入水は、女主人公の心的状態の悲惨さを示すとも、死と再生の象徴とも言われる。どちらの要素も二本に該当する。入水は両本にとつて、「鉢かづき」の居場所を動かし、新しい生活を導く契機である。御巫本の位置は、隠されていた悲痛な恋心が表れるという意味で、そこに恋の観点も加わるという効果があるろう。

御巫本では、「中将」の淀川放浪に該当する場面はない。代わりに、「宰相」の恋心の強さを示す場面として、両親の示唆による「乳母の諫め」の場面が置かれる。「鉢かづき」を追い出せという母の意向を伝える乳母に対して、「宰相」は次のように答える。

一樹の蔭、一河の流れを汲むことも、他生の縁とこそ聞け。古も、さることあればこそ、主の勘かうぶり、千尋の底に沈むとも、妹背の中はさもあらず。親の御不審かうぶりで、たちまち無間に沈むとも、思ふ夫婦の中ならば、何か苦しかるべきぞ。殿上の御耳に入り、たちまち御手にかかるとも、かの鉢かづき故ならば、捨つる命は、露塵ほども惜しからず。かの入水捨てんこと思ひもよらず。このこと用ひ申さぬとて、鉢かづきもろともに追ひ出し給ひなば、いかなる野の末、山の奥に住むとても、思ふ人に添ふならば、ゆめゆめ悲しかるまじ。

ここには、主人の勘当や親の成敗、五逆罪を犯した者が墮ちる無間地獄の苦しみよりも、「思ふ夫婦の中」が優先されている。当時の一般的な倫理や信心の概念では、罪の報いとしか思われぬ事象が、逆に「妹背」の絆の強さを示すものとして使われている。中世物語では、恋や親子の愛情は、成仏のための方便にすぎず、それともすれば墮地獄を招く妄執となる危険をはらむものであった。しかし、ここではそのような意識は捨象され、地獄の恐怖は現世の恋を強化し、肯定するために用いられている。その一方で、「鉢かづき」との縁は、「他生の縁」によって前世から定まったものとして捉えられている。つまり、この場面の仏教用語は、二人の仲を肯定するために、都合のいい意味だけを選択して使っている。

御巫本と御伽本を比較すると、京都の「関白」邸から淀川河畔へと場所が変化する御巫本は、作品の新しい感興を生むと言う点では、視点の移動に効果がある。御伽本では場所は「二位中将」邸から動くことはない。しかし、恋の思いという点を考えると、御巫本は「隠れた恋」に終始している。また、「鉢かづき」を探す意図も、後世の供養という通常の仏教概念を守っている。男主人公の恋心は、「ひるはひめもす、よるはよもすから、おもひあかし給ひける」と、簡潔に記されるだけである。非難される身分違いの恋を公にし、墮地獄をも厭うことなく、恋を貫く決意を繰り返し述べた御伽本の方が、その思いは具体的に、強く享受者に

伝わりと考えられる。

恋の阻害の第二は、「嫁くらべ」の画策である。御巫本では、二人の仲は、「くわんはくとの北のかたまで、きこしめし、きんたち・もんじに、いたるまで、御物なけき」となった。人々は二人を引き離すために「よめあはせ」を計画する。それは「御よめこせんを、しやうしまいらせ、いしやうもみくるしく、みめかたちも、あしからん、いやしけなる人を、御らんせん、きんたちをは、御ふけうとあるへし」という内容であった。また、目的は、「中将殿に、はちをあたへ、まいらせさせ、給へ候かし、もし、おほしめしわすれもや、する」「ひとへに、はちかつきを、はぢしめん」ためであった。ここでは両親を頂点とした家門の総意として、二人に恥を与えて、卑しい者に通う息子を断罪しようという意図がうかがえる。嫡男であっても、「中将」は家門の権力によって守られてはいない。

御伽本では、「嫁合」は、「宰相」の母と乳母との談合の結果として計画された。「かの鉢かづき恥づかしく思ひて、いづくへも出でゆく」と考えたからであった。ここでは「嫁合」は、母親の手による我が子を守るための方策である。「宰相」は地位を守られる立場にあり、「鉢かづき」だけが家門を犯すものとして追放されようとする。両人の関係性を考えると、御伽本の方が、関係断絶の危機感を、強く読者に訴えられる。恋の展開の点では、御伽本が今後の進展により興味が増すと見える。

五、鉢の落下

「嫁くらべ」に出るべき手段もなく、進退窮まった二人は、家を捨てる決心をする。御巫本では、そこにいたる嘆きと決意は、「中将」のものとして描かれる。「中将」は「いつかたへも、もろともに、かくれしのはん」「此あかつき、もろともに、しのひいてん」と嘆きだけである。「鉢かづき」の感情は描かれていない。ただ神仏に祈るだけである。

はちかつきは、しんくをいたし、とうさいなんほくを、ふしおかみ、ふつしん三ほうに、きねんし給ひ、我うちの御てら、はせのくわんおん、ならひに、てんまんてんしん、なうしゆまし／＼て、わかみのいんくわ、つたなくて、さてはつへきにて候は、たちまちに、いのちをとり候へとて、ふしおかみたまひければ、いた、きたる、はち、はこ、たちまちに、まへ、そ、おちたりける。(御巫本)

「鉢かづき」は実家の菩提寺⁶であり、自分が「申し子」となった長谷寺と、天満天神に祈念し、死を願う。「中将」への強い思慕がそこにあることは当然である。しかし、「中将」自身は、二人で隠棲して生きることを願っている。相互に思い合いながらも、この段階で、二人の思いは齟齬をきたしている。「中将」に従って「閨白」邸を出ることも可能であるのに、「鉢かづき」はなぜ死を望む

のか。理由は明確ではないが、「中将」に添えない前途に絶望したためと考えられる。「鉢かづき」の祈りは受納され、死の代わりに、鉢と箱が落ちる。本人の信心が、それらを落としたと言える。

この場面は、御伽本では大きく異なる。「鉢かづき」は「宰相」を守るために、「われわれ、いづくへも行かん」と、自分から身を引く決心をする。それに対して「宰相」は、「御身に離れては、片時もみられ候ふまじ。いづかたへなりともに出でん」と、どこまでも「鉢かづき」と運命をともにする覚悟で応じる。

この覚悟は、「嫁くらべ」の当日にも、「宰相殿、鉢かづきと二人、いづくへも立ち出でんとおほしめしける」と、繰り返して表明される。しかし、「宰相」の心は、「今一度父母を見奉りて」と揺らぐ。それでも、死別のことを考えて思い切る。「鉢かづき」はそれを見て、「われ一人、いづかたへも出で参らせん」と、再び一人で邸を出ることを表明する。「宰相」は「いづくまでも、御供申し候はん」と、堅い決意を表す。続く二組の応唱歌には、その心が示されている。

君思ふ心のうちはわきかへる岩間の水にたぐへてもみよ

(宰相)

わが思ふ心のうちもわきかへる岩間の水を見るにつけても

(鉢かづき)

よしさらば野辺の草ともなりもせで君を露ともともに消えなん

(鉢かづき)

道の辺の萩の末葉の露ほども契りて知るぞわれもたまらん
(「宰相」)

最初の唱和では、「岩間の水」に例えて、お互いの湧き返る愛情を述べている。次の唱和では、「鉢かづき」は自分を「草」に、「宰相」を「露」に例えて、ともに消えることを願う。「消えなん」という願望は、この場合は、「邸から消える」ことと「この世から消える」ことの、どちらとも解することができる。それに対して「宰相」は、二人の契りの儂さを「末葉の露」に例えるが、それを知ったからにはともに日を送ることを誓う。「鉢かづき」の第二歌は現在の状態への失望を詠む。「宰相」の答歌は、短い契りを二人の関係の永続の契機としてとらえている。二歌は完全に照応してはいないようである。しかし、どちらも、いつまでも二人がともに在ることを強調する。第二の唱和はこの点で呼応し、愛情を表明する歌となる。

それでもなお「宰相」は、両親への名残りをふり切れない。「左右なく出でやらず、ただ御涙せきあへず」と、最後まで躊躇する。御巫本では、このような男主人公の心の揺らぎは、まったく描かれていない。「中将」は、状況をただ嘆くだけである。御巫本では、両親と「鉢かづき」の間で揺れ動きながら、「宰相」は「鉢かづき」への愛情を固めていく。「鉢かづき」の心がそれを促す。こうして、出奔という危機を通して、二人の愛情が固く結ばれていく過程が細かく描かれる。

「宰相」は最後には家を捨てることを決心する。それに感応したかのように、「夜もやうやう明け方になりぬれば、急ぎ出でん……とし給ふ時」、「いただき給ふ鉢、かつばと前に」落ちる。鉢の落下は、多くは、長谷観音による「鉢かづき」への庇護の賜と考えられている。「鉢かづき」の祈りに呼応して鉢が落ちた御巫本は、その典型であろう。しかし、御巫本はそれだけではない。「鉢かづき」は鉢が落ちたことを、「わが母長谷の観音を信じ給ひし御利生」と、まず感じている。「鉢かづき」にとつて、鉢を落としたものは、自分の信心ではなく、「母」の信仰であった。御巫本でも御巫本でも、「鉢かづき」は長谷観音の「申し子」であるから、その庇護を受けることは当然である。御巫本では、そこに信仰という形での亡母の愛情が重層している。

一般に親の過度の愛情は、仏果の妨げとなり、「鉢かづき」の鉢は、亡母の執着の象徴と考えられている。例えば松原秀江氏は、鉢を「北の方や姫君の、心得違いによる人としての未熟さ・幼さ、即ち、傾倒無明の煩惱」と評し、二人を「死んでもなお身を分けた姫君に愛着して、中有にさ迷う北の方」「亡き北の方に、「法華経八卷・数の御経ども」を、教養の一部として与えられながら、一顧だにせず、ひたすら実母北の方を慕って歎きさ迷う姫君」と規定している。しかし、仮に亡母が全く娘に執着せず、そのまま成仏したとしたら、「鉢かづき」はどうなったであろうか。継母はその性格が実の娘の結婚さえも妨げてしまうような「慳貪者」である。たとえ異形でなくとも、継子である「鉢かづ

き」が疎んじられることは明白である。そのために、母の思いは鉢に凝り固まって、娘を継母から引き離したのではないか。確かに、異形によって娘を苦しめる鉢は、娘を縛る悪しき因果としての母の妄執の象徴と言えよう。しかし、それは一方では、「里人」や「湯殿の奉行」という心ない男の手から、「鉢かづき」を守る役目も果たしている。「鉢かづき」に近づくことができたのは、「業因」によって、異様な外見に惑わされなかった「宰相」だけである。以前論じたように、亡母は鉢に仮託して、我が子を婚と見極めた男性の手に託した。御巫本にはない男主人公の心の揺らぎが、御伽本では詳細に記されていることは、鉢（亡母）が婚の確かな愛情を見定めるためには、必須の経緯であったためと考えられる。鉢の落下を促したのは、「宰相」の固い愛情であり、それが亡母の信頼を獲得したからだと言えよう。それならば、母は鉢と化して、自らの仏果を捨ててまで、娘を守ったとも言える。観音はその自己犠牲とも言える母の思いに感応して、鉢の落下を認めたのではないか。松原氏は落下を、「法でもあり仏でもある観世音菩薩の「方便力」を示すもの」と考え、その力は「鉢かづき」の「宰相」に対する無私の愛情を観音が愛でた結果とする。しかし、母の信仰への利益を加味するならば、観音の加護は、母の愛を外側から覆う広大な慈愛として、鉢の落下に関与したと言えよう。

「宰相」が「鉢かづき」の夫として認知されたことは、鉢から出た宝物によってもわかる。それぞれの本では、次のような品々

が列挙されている。御巫本のこの部分については、読解の便のため、私に漢字を宛てた。

二つ懸子のその下に、金の丸かせ、金の盃、銀の小堤、砂金にて作りたる三つなりの橋、銀にて作りたるけんぼの梨、十二單の御小袖、紅の千人の袴、数の宝物を入れられたり。

(御伽本)

八十二の懸子、唐の鏡、五尺の鬘、掛け帯、十二單の唐衣、金襴の宿直物、金の橋、銀の本銚子、瑠璃の盃、瑪瑙の石の帯、獅子の歯、象の牙、豹・虎の皮、水晶の数珠、妙音天の琴、瑞腦の琴爪、かふの玉、火鼠の革衣、様々の宝物。(御巫本)

「小袖」や「袴」「唐衣」は、母が娘のために用意した婚礼衣装を、「盃」や「小堤」「本銚子」は婚禮の「盃事」を連想させる。また、御伽本は財宝の概念が、金銀の作り物と衣類で示されている。それに対して御巫本では、「閨白」の嫡男である「中将」を意識してか、御伽本よりはるかに豪華な宝である。同じ衣類にしても、「唐衣」「石の帯」などは、高位の公家の装束である。「獅子の歯」「象の牙」「豹・虎の皮」「瑞腦の琴爪」などは唐・天竺からの輸入品を思わせる。「妙音天の琴」「火鼠の革衣」は非現実的とも言える珍宝である。二本の相異は登場人物の身分差を示す。御伽本の「鉢かづき」は、御巫本のような貴種（後に判明するが、

皇統に繋がる)ではない。地方豪族の娘であり、結婚相手も閔白の子息という高位の公家ではなく、中流公家である受領の息子である。これは作者・読者階層の差にもつながる。御巫本の方が身分・知識教養が遙かに高いと言える。また、御巫本の品々は、「我が朝の物にはあらず、仏在世のもの」と思われる「はちはこれ、十六大まわうの、るかのはち、はこは又、しやうりやうせん の、もんしゆの、御はこ」と相まって、「中将」が鉢の落下に感じた「ふつたのかこ、しんくくの、つうずる所」同様、「はせてらの、くわんおんの、御ひくわん、てんまんでんしんの、御りしやう」である。

このように、鉢の落下の場面では、御巫本は「鉢かづき」の信心に感応した神仏の加護が強調される。御伽本からは、亡母の娘に対する愛情と守りを読みとることができる。なお、両者ともに、鉢が落ちた時点で、地の文での女主人公の呼称が、「鉢かづき」から「姫君」へと変化している。これは「鉢かづき」が、本来有していた貴種性を回復した結果と考えられる。

六、「嫁くらべ」と恋の成就

鉢の落下によって「鉢かづき」本来の美貌が現れ、亡母が鉢に封じた財宝によって支度を調えた二人は、「嫁くらべ」の座に臨む。この場面も御巫本と御伽本では、いくつかの点で大きく異なる。

第一の相違は、「嫁くらべ」に対する父「閔白」の態度である。

人をおほくあつめて、さしいらんより、てをた、き、ひやうしをうち、おとろかし、しんとうして、わらひし、さしきは、一なけし、きりさけて、いぬのふしとのことくに、こしらへよ、た、みまでもあるへからず、わらむしろをたつね、しかすへし、さかづきは、ふるこきも、いかに、ふりたらんに、はんさいにいたるまで、ふさたにこしらへ、中将ともに、しりめかりかけて、めんくくに、かほまもり給へ……。

(御巫本)

嘲笑の方法や、卑しめるための敷物や什器の指示からは、「閔白」が率先して、家門を汚す「鉢かづき」と我が子の「中将」をともに排除しようとする意図が読みとれる。御伽本の「三位中将」が、「いづくへも行かずして、ただ今恥をかくべきことの悲しきよ。何しに嫁合などと言はずとも、よきも悲しきも知らぬ体にて置くべきものを」と嘆くこととは、正反対である。また、御伽本の嘲笑の方法は、「見て笑はんとぞじじめきける」程度である。「鉢かづき」の座も「御座敷一段下りて、こしらへたる所」であり、どちらも侮蔑の度合いは低い。また、御伽本の「嫁くらべ」は、「宰相」の母親の計画であった。父を頂点とした家門の総意による異分子の拒否ではなく、「嫁の座」の認知を厭う母の私的な感情という要素が強いと言える。

第二に、「嫁くらべ」の座への出現の方法である。御巫本では、華やかに装束した「中将」と「鉢かづき」が、いっしょに座敷へ出る。御伽本では「鉢かづき」は単独で座に出る。「鉢かづき」自身の能力が試される状況が、御伽本のほうが明確になっている。また、このとき「鉢かづき」は、御巫本では「中将殿北のかた」と記される。父「閔白」が認めない限り、これはあり得ない。地の文が「嫁くらべ」の結果を先取りしたと言える。読者にとつては、結果への興味を削ぐことになりかねない。さらに、御巫本では、座敷に現れた「鉢かづき」は、そのまま「しうとめこせん」の、ひたりのさ」に直る。理由は書かれていない。周閉を圧倒する美麗さであったとは言え、卑賤の身を貶められる「鉢かづき」が自分から姑の側に座することは、不自然である。強いて言えば、仏神の加護の強調であろう。御伽本では、「鉢かづき」が「一段下が

りて」設けられた場所に座ろうとすると、舅となる「三位中将」自身が、「いかで天人の影向を下座に置くべき」と、「あまりのいとほしきに、母御前の左の膝もとへ呼び参ら」せる。「嫁くらべ」主催者の主体的判断として「鉢かづき」を評価したことが、明確になっている。評価の理由である美貌への賞賛も、御巫本と御伽本では程度に相違がある。御巫本では、座の人々が弟嫁たちを「鉢かづき」と比較して、「やまにすむけさる」と感じる。また、母も、「御かほをあかめて」その不明を恥じる。御伽本では、兄嫁たちは「この姫君に合すれば、私の御前に悪魔外道」と言われる。「鉢かづき」を覗き見た兄たちは、「とても人間に生

れなば、かやうの人とこそ一夜なりとも契り、思ひ出にせん」と羨む。父は「このほど、宰相の君、絶え入り思ひつるこそ理なれ」と納得する。このように、御伽本の方が美貌の賞賛の程度が高い。また、「鉢かづき」が「宰相」の嫁として認知されるための合理性が、数種の人々の言葉によつて予知されている。

第三の相違は、嫁の「能力くらべ」である。これは御巫本には存在しない。「鉢かづき」の美貌と豪華な引き出物に驚嘆し、「中将」の弟夫妻たちは面目を失つて座敷を立つ。「閔白」は不思議に思つて、「鉢かづき」に出自を尋ねる。「鉢かづき」が「きよはらの、てんわうに、十六代の御すゑ、いまは、たみとなり給ひて、つのかに、かたの、へんに、きよはらの、つのかみ、ゆきかた」の子であり、長谷観音の「申し子」であることを知らされる。「閔白」は「ありかたき御事」と感嘆し、「鉢かづき」には二十万町を、「中将」には十万町の所領を与える。このように、御巫本では、「鉢かづき」に長谷観音から与えられ、守られていた美貌と財宝によつて、対抗者である弟夫妻たちが退けられた。さらに、「申し子」への畏敬が、父「閔白」から所領と総領の地位を引き出した。それは天皇の後胤という血筋に相応しいものであった。つまり、「鉢かづき」自身の能力とは無関係に、「申し子」であることによる天与の福分が、二人を幸福にしたと言える。ところが、御伽本ではそうではない。「嫁御前」たちの「能力くらべ」が、「嫁くらべ」の後半の中心となる。美貌と引き出物で圧倒的優位に立った「鉢かづき」に対して、「兄嫁御前」たち

は談合して、排斥を画策する。第一は「管絃」の能力で、「和琴」の演奏を「鉢かづき」に割り振る。「和琴は、ことにその源を知らせざれば、左右なく弾かれぬ」ためである。新たな苦難に、「鉢かづき」は一旦は辞退する。しかし、それは能力がないことを卑下したためではない。「鉢かづき」の才能は、「三位中将」への目見えのときに、「琴、琵琶、和琴、笙、箏、篳篥、古今、万葉、伊勢物語、法華経八卷、数の御経とも読みし」と表明されている。また、「鉢かづき」自身も、「母にかしづかれし時には、朝夕手馴れし楽の道なれば、弾かうずもの」と、自分の能力には自信もっている。そして、「三べん調べ」た。最初の辞退は、卑下や謙遜の態度で兄嫁たちに自分を軽視させ、その後で発揮される自分の実力を、より高いものに強烈に印象づけることにつながる。「鉢かづき」は兄嫁たちの意図も、「われを賤しき者と思ひ、かやうにして笑はんため」と、的確に認識している。したがって、ここでの「鉢かづき」は、兄嫁との駆け引きを演じ、自分により高い価値を付与するように演出している。「宰相」の「わが身を姫君と見よかし、行きて弾かんものを」という焦燥とは対照的に、積極性を身につけた女性に変貌している。

「鉢かづき」の能力は、和歌や書についても発揮される。そのときも管絃同様に、「われわれが能には、このほど湯殿に候ひて、朝夕手馴れし水車、汲み上げしよりほかのことはなし。歌といふことは、いかやうなるものやらん、少しも存ぜず候ふ」と卑下し、「姫君は、今日の御客もじにてましますば、まづまづ一首あそば

し候へ」と強要されるという、駆け引きがあった。人々は即興の和歌を「道風がふるひ筆」に匹敵するように書いた「鉢かづき」を、「この人は、古の玉藻の前か、恐ろしや」と畏怖する。絶世の美女で鳥羽法皇の寵姫であった「玉藻の前」は、唐・天竺の諸王を淫酒で誑かし、悪逆非道の限りを尽くした末に日本に飛来した金毛九尾の妖狐の化身であり、後に那須野で射殺されて殺生石となった（謡曲「殺生石」、御伽草子「玉藻前」など）。このような人知を超えた禍々しさをもつ存在と比肩されるということは、「鉢かづき」の能力の高さを、恐怖を伴うほど強烈にアピールする。その結果、父は全所領三三〇〇町のうち、一千町を「鉢かづき」に、一千町を「宰相」に、残りを兄三人に分配する。兄たちは末弟を総領と認めることに同意させられる。この時点では、「備中守さねたか」の子という「鉢かづき」の素性はまだ明らかにされていないので、妻の身分ではなく、「身の能」と美貌が大に幸福をもたらしたと言える。

このように、御伽本では、天賦の福分だけではなく、母の生前に薫陶された教養にもとづく能力がなければ、「鉢かづき」は「嫁くらべ」に勝利することはできなかった。このことは、「鉢かづき」の恋が成就するには、観音の庇護とともに、亡母の力が深く関与していることを示している。

「嫁くらべ」は「鉢かづき」独自の趣向ではない。「うばかは」や「美人くらべ」では、御來本のように美貌が比べられ、それに勝った主人公が、男主人公の妻の座を得る。一方「岩屋の草紙」

では、「蓬萊」に関する学識・琴・琵琶・方磬・和琴の才が試される。『宮屋の草紙』や『花世の姫』には、御伽本と同様に、嫁の能力を比べる「嫁くらべ」がある。「花世の姫」では、聞香と「よみかき、ひわこと」の才が比べられる。しかし、これらの作品では、「嫁くらべ」に勝利するための要素に、母親の力が関与していることは、特別には描かれない。『鉢かづき』の御伽本が「鉢かづき」の能力に、「母にかしづかれしとき」と、ことさらに母の薫陶を強調しているのは、娘の幸福獲得のためにはたらく「母の力」を重視したためではないかと考えられる。

七、幸福の完成

「嫁の座」の獲得は、御巫本では直ちに幸福の完成につながる。「鉢かづき」夫婦は内裏に召され、「中将」は内大臣に叙せられ、自身は「とのものゆふひめ」となる。実父「つのかみ」は左大臣と畿内の押領使の官職を得、皆長寿と栄華を極める。しかし、御伽本では、「嫁の座」と幸福は直結しない。御伽本の「鉢かづき」には、「母上の御菩提ねんごろに申ひ」て子としての務めを果たし、多くの子を得た後も、「故里の父御前を恋しく」という屈託があった。この欠損は、父子が長谷寺で再会することによって埋められる。

再会の要因は、一つは、零落した父親が讒言によって追放した子への思慕を起こし、長谷観音へ詣でて「肝胆を砕き」て再会を

祈念したことである。なぜ父が長谷観音を選んだかは、「去りにし北の方、子なきことを悲しみて、長谷に詣で、さまざま祈り、観音の御利生により姫を一人まうけしに」という、亡き妻の縁による。第二は、「宰相」が大和・河内・伊賀三国の国司に任じられた慶賀のために、一家一門で長谷寺へ詣でたことによる。長谷寺の選択は、靈験に対する平安朝以来の貴庶の信頼だけではなく、亡母の信仰の対象であったことに由来することは明白である。

しかし、この再会は、「鉢かづき」の方から何らかの働きかけを起こした結果ではない。国司一家の参詣のために御堂を巡われた修行者（父）が、公達を見て泣くのを不審に思った従者が、その素性を尋ねる。修行者は先祖を語り、公達が我が子に似ていることを告げる。それを聞いた「鉢かづき」は、修行者を呼び寄せ、ここで初めて、「鉢かづき」は父親と知り、自ら出て行って再会を果たす。これに観音の恩寵がはたらいっていることは、「これは夢か現か、ひとへに観音の御利生なり」という父の言葉によって、明確にされる。

ところで、観音は何に感応して、再会という利益を与えたのであろうか。亡母や父の信仰と娘への愛情が観音に嘉納されたのは当然である。「鉢かづき」自身はどうか。「宰相」の妻となつて後、「鉢かづき」が長谷観音を信仰したとは、特別には書かれていない。再会に関して「鉢かづき」が行ったことは、父を見た瞬間に、「これこそ古の鉢かづきの姫にて候へ」と、自分から出自を暴露したことである。「さすが親子の御ことなれば、人目も憚らず」

という表現には、行方不明の父親への思慕が、強烈に表れている。

なぜ「鉢かづき」は、これまで父を捜さなかったのか。国司の総領の嫁という地位を考えると、簡単にできたはずである。また、夫の要請にも関わらず出自も明かさなかった。どちらも「継母の名を立つるにやあたらん」ことを憚つたためであった。また、出自を明らかにすることは、継母だけではなく、自分を捨てた実父の非道を曝すことにもなる。自分の思いよりも、継母子の義理や現在の親たちの名を優先した優しさが、「鉢かづき」に沈黙を守らせた。観音はこのような「鉢かづき」の孝心を愛でたのではないか。言うまでもなく、孝行は近世人に課された最大の徳目の一つである。同じ御伽文庫本のシリーズのなかでも、『唐糸草子』では、我が身に替えて母の命を救う少女「万寿」の孝行が描かれる。『七草草紙』『蛤草紙』では老親への孝行が、『二十四孝』にはさまざまな孝行の形が描かれる。

父子再会のこの場面は、「鉢かづき」の「人格の完成」「心の完成」として、また「家の歴史の完成」として読まれる。「鉢かづき」の心の成長は、「宰相」との恋を成就することによって鉢が落ちた段階で留まるのではなく、結婚して子を生み、それによって親に孝を尽くすという、当時の女性としての義務を果したことで完成する。これが「鉢かづき」の幸福の完成と言える。この発想は御巫本には存在しない。「鉢かづき」は「嫁くらべ」の席で素性を問われた際に、「四てうのつしに、すてられて」と、二親の残虐な行為までも露見させてしまう。しかし、親の恥

を述べる不孝は、「くわんおんの、御りしやう」の「ありがた」さによって、不問に付されてしまう。

このように、「鉢かづき」の幸福の完成は、御巫本ではひとえに観音の利生による。御伽本はそれだけではなく、利益の前提として、親への孝心という要素が加わっている。

「鉢かづき」の物語は、長谷観音の威徳を賞揚する形をとる。ただし靈験への依拠は、御巫本と御伽文庫本では大きく異なる。御巫本では、観音の利生によって「鉢かづき」の恋が成就し、それが皇胤という血筋の回復と末繁昌をもたらす。「鉢かづき」の幸福は、長谷観音の「申し子」である福德のみによって完成される。「その、ち、はちとはことは、てんかにおさまり給ふ」と、長谷観音への祈誓によって与えられ、苦難と幸福の根源であった「鉢」と「箱」が、物語の最後に再度注視されているのは、その証左であろう。それに対して、御伽本では、同じ観音の威徳を説く物語であっても、仏教色は御巫本よりは希薄である。「申し子」の要素は最後にならなければ判明せず、仏教用語は本来の意味を示すよりも、修辭として利用される場合が多い。何よりも、「鉢かづき」の恋と幸福は、観音の加護だけでは完成しない。そこには、冥慮を引き寄せた両親の愛情と信仰、また母の愛によって授けられた教養が、不可欠の要素として加味されている。貴種ではない少女が、自身の能力と親の愛情によって、恋を契機として幸せを得る。それを観音の広大な慈愛が包む。この発想は、妻とし

て母として、またそれらになるために、「女中身を治る便とす」
る（洪川清右衛門刊行「御祝言御伽文庫」の宣伝文句） 作品には
最適のものではなかったか。

注

- (1) 以下、因幡堂・八幡（石清水）・賀茂・春日・稲荷・
祇園・北野・平野・白川・南禅寺・粟田口・長楽寺・靈
山・比叡・今熊野・深草・藤の森・鳥羽伏見・粉河・山
崎・高尾・良峰・赤居明神・大原・西の岡・三室・多武
峰・松尾・法輪寺と続く。
- (2) ジャクリース・ピジョー氏「御伽草子にみる女の入水」
〔文学〕50号 一九八二年十二月 岩波書店
- (3) 島内景三氏「鉢かづき」―如意宝の両義性―〔御伽
草子の精神史〕所収 一九八八年 ペリかん社
- (4) 松原秀江氏「観音利生譚「鉢かづき」」第六章「薄雪
物語と御伽草子・仮名草子」所収 一九九七年 和泉書
院
- (5) 「若草物語」「小落窪」などがある。
- (6) 鉢が取れない姫を嘆く父の言葉に、「なんちか、うちの、
御でらなれば、はせのくわんおんに、まいりて」とある。
- (7) 当該歌は、「道端の萩の葉末に置く露のような儂さであ
っても、私はあなたと契って知ってしまった。露が僅か
な間でも葉に溜まるように、たとえ儂くはあっても、私

はあなたとの契りをできる限り長続きさせようと決心し
たことを」の意味と解される。

- (8) 注(3)、注(4)、岡田啓助氏「鉢かづき」の鉢と
「二寸法師」の腕〔鉢かづき研究〕所収 二〇〇二年
おうふう など。

(9) 御巫本では冒頭で「つのかみ」夫妻が「申し子」をす
る情景が描かれ、末尾でも「鉢かづき」自身が長谷観音
の「申し子」であることを「関白」に語る。御伽本では、
零落した父の述懐のなかで語られる。

- (10) 注(4) 論文第三、第五章。

(11) 拙稿「鉢かづき」の母子像―「鉢」に見る「絆」―
〔日本文学〕47巻9号 一九九八年九月 日本文学協会。

- (12) 注(4) 論文第五章。

(13) これらの宝物のうち、「妙音天の琴」は、「妙音天女が
持つ琴」と解される。「妙音天」は「弁財天」の別称であ
るが、一般の図像では琵琶を持つ形で表される。ただ京
都の西園寺家などで行われた妙音天を祀る「妙音講」で
は、弁財天像に供物を供えて琵琶などの音曲を手向ける
〔妙音講 西園寺家被修……今日供種々珍菓於家内妙
音天像之前。堂上並衆人相聚修管絃〕〔日記記事〕
六月十五日条。管絃では当然琴も使われるので、これが
混入した可能性もあるのではないか。「瑞脳」は「龍腦香」
を言う。これは龍腦樹に含まれるアルコールの一種であ

る。したがって、「瑞腦を採る木で作った琴爪」を指すと
思われる。「火鼠の革衣」は、『竹取物語』で「あべの右
大臣」に命じられた「火鼠のかはぎぬ」をイメージした
と考えられる。

(14) 「清涼山の文殊の箱」。「清涼山」は中国にある五台山の
一峰。文殊菩薩が住まう山とされる(「文殊、清涼山にす
まふと遙かに伝へ聞きて」『今昔物語集』卷六第十語)。

(15) この表現には地理的な矛盾がある。淀川より南の地域
である交野は河内国に属する。津の国(摂津国)は淀川
より北の地域である。

(16) 注(11)に同じ。

(17) 注(4)論文第八章。

(18) 注(3)に同じ。

(19) 注(4)論文第七章、第八章。

(20) 例えば『女訓抄』『女仁義物語』他に説かれる「三従之
教」など。

(とみだ・なるみ 立命館大学非常勤講師)